

勸山弘氏は、古刹の住職を勤めながら、生涯の奉仕活動として44年間、献眼の推進を呼びかけ、国内運動に発展させた。現在、角膜移植は1957年に初めて実施されてから今年で51年になる。これまで5万例を超す移植手術が行われ、多くの人々が光を取り戻してきた。

勸山氏のこのアイバンク(献眼)運動は、1964年の夏、檀家の亡くなった方の通夜で法要を終えてまもなく、医師が角膜を摘出する様子を見たことに始まる。以前から奉仕活動で訪れていた施設で400人のハンセン病患者のうち、病原菌で角膜を侵され、36名もの失明者がいることを知らされ、身近な問題として気に掛けていた。そんな中、角膜移植によって目の不自由な人に光が戻ること深く感動し、これこそ自分が生涯を掛けて奉仕する活動だと心に決めたのである。

そして、1964年、沼津のライオンズクラブを通し、日本で初めてアイバンク(献眼)運動の推進を始めた。1971年には、「第1回アイバンク運動全国大会」を沼津で開催し、全国から1,000人が集まり本格的な眼球登録運動に発展した。以降、毎年全国各地で大会を開き、2008年9月に36回目を迎えた。

その後、国際的な活動として、1979年には、国際児童年にちなみ目の不自由な子どもたちに角膜のプレゼントを計画。スリランカを訪問し、同国より2000の無償提供を受け、その角膜は北海道から鹿児島まで全国の病院

# 人間が限りある 人生を終わったとき 人々の心に何かを 遺していけば それは死ではない



1976年スリランカ国際アイバンクビル建設資金をウィリアムコハラワ大統領へ手交する

に送られ、121人の子どもたちが視力を回復した。

1990年には、アイバンク(献眼)運動を中国に広げ、浙江省に2つのアイバンクが誕生する。1997年には運動を北京に波及させた。さらに、2000年には瀋陽を基点に東北3省へ運動を展開。以降、瀋陽、長春、ハルビン、大連で毎年基金を提供して研修大会を開き、啓蒙に努めている。

今日の角膜移植への理解は、医療関係者やアイバンク事業者の努力はもちろん、一般大衆のアイバンク(献眼)運動がなければ、これほど実り多い成果をあげることができなかった。



ライオンズクラブからの寄贈金で国際アイバンクビル建立

すすやま ひろむ

**勸山 弘** NPO 日本アイバンク運動推進協議会 最高顧問



1944年大谷大学卒業後、真宗大谷派「真楽寺」(沼津市末広町)24代住職に就任。ハンセン病患者を収容する国立駿河療養所の輔導使を務める(平成8年まで34年間)。その他、沼津市教育委員長、静岡県家裁調停委員、静岡公安委員長、同県仏教会長、沼津ライオンズクラブ会長を歴任。NPO法人「日本アイバンク運動推進協議会」創設者であり現在、最高顧問を務める。

推薦者 **高地 英寿** 社会福祉法人読売光と愛の事業団 常務理事